

# 会計教育に関する教員の意識

— アンケート調査の暫定的結果 —

柴 健 次

## はじめに

我々科研チーム<sup>1)</sup>は、会計専門家のための会計教育（専門会計教育）を除いて、幅広い層に対する教養としての会計（教養会計）の在り方と、その教養会計で学ぶべき内容（会計リテラシー）の特定化の研究に取り組んできている。その研究の基礎とするために、学ぶ側の意識調査を主にした数組のアンケートを実施してきた<sup>2)</sup>。このうち柴が班長を務めた高校生向け調査研究班<sup>3)</sup>の分析が相対的に進んでいる。研究途上で複数の学会で調査結果を報告したが、その際、統計的分析の実施を求めるコメントがあり、これに応じて、班長の柴が統計学者と組んで報告書で示した結論を再検証した<sup>4)</sup>。

高校生向け調査研究班の調査報告並びにこれを対象とした再検証において重視した内容は、会計の機能に対する評価と、会計の学習項目に対する評価、そして関連して、会計に対する好き嫌いと会計の教育効果である。これらにつき、学習者の意識に関する一定の結論を得たのを機会に、このたび、会計教員の意識調査を実施することにした<sup>5)</sup>。

---

1) 本チームは、科学研究費基盤研究（A）課題番号25245057、研究期間 2013年度から2015年度、『会計リテラシーの普及と定着に関する総合的研究』に携わる研究集団である。

2) 現段階で4つの調査報告書を取りまとめている。大学生向けアンケートの調査報告書（班長工藤栄一郎、2015年7月31日）、高校生向けアンケートの調査報告書（班長柴健次、2015年2月19日）、市民向けアンケートの調査報告書（班長柴健次、2015年2月19日）、社会人向けアンケートの調査報告書（班長佐藤信彦、2015年12月15日）である。このほか、就活生向けアンケート調査（班長籾本智之）、ICTに関するアンケート調査（班長福浦幾巳）が実施済みであり、目下、分析中である。

3) 班長柴健次、班員浦崎直浩、島本克彦、岩崎千晶から構成される。

4) 荒木孝治、柴健次、「高校生の会計教育に関する意識——「会計教育に関する高校生アンケート」の分析——」『関西大学商学論集』第60巻第3号、1-19頁、2015年12月。

5) 本チームは柴を班長とし、工藤栄一郎、浦崎直浩、島本克彦、岩崎千晶の協力得て実施した。その結果、8月末から10月末までに493件の回答を得たので、これらについて分析する。内訳は大学教員117、高校教員153、専門学校教員223である。その質問内容は、本稿末尾の資料1と資料2に示している。本稿においては、大学教員向け調査と高校等教員向け調査に共通する30の質問（Q11からQ40）を比較している。その30個の質問についての度数と平均値を資料3として示しておいた。これら30個の質問以外の内容に関する分析

本稿では、会計教育に関する教員の意識を明らかにすること、すでに実施してきた学習者の意識調査の結果と対比することを通じて、会計教育の現状を明らかにしたい。ただし、今回の会計教員に対するアンケート調査については一部配布先からの回収待ちであること、ありうる誤答などの精査が必要であること、統計的検定に掛けて全貌を明らかにするには時間を要すること等から、今回は、回答の度数分布と平均値に限定して、会計教育に関する教員の意識を描きだしてみたい<sup>6)</sup>。

## 1 高校生向けアンケート調査の結果

高校生の意識が学習者の意識を代表しているわけではない。しかし、我々が実施した複数のアンケート調査のうち、高校生に対するアンケートにおいては、会計の機能に対する高校生による評価（4項目）と、会計の学習項目に対する高校生による評価（6項目）を測るための質問項目をおいた点で他と異なる。特に後者は、会計リテラシーの内容を議論する際に重要となる質問項目である。そこで、このたび、会計教員に対する意識調査を行うにあたり、これら10項目と同じ質問を含めた。それゆえ、教育者と学習者の意識を対比できることになった。本節では、柴（2015）と荒木・柴（2015）から高校生における意識で明確になった事柄を確認しておきたい。

### （1）調査目的

我々科研チームの調査目的は、会計教育を専門教育と教養教育に二分した時、後者（教養会計）において教授すべき（学習すべき）内容を特定するための手掛かりを得ることである。

### （2）調査項目

高校生向けのアンケート調査では、回答者の属性に関する質問（Q1～Q4）、高校における会計教育の実態を探る質問（Q5～Q14）、会計の機能と学習領域に対する高校生による評価を探る質問（Q15～Q16）を行った。詳しくは柴（2015）を参照されたい。

### （3）重点項目

柴（2015）では1770の有効回答を分析するに当たって、Q15とQ16の枝問10個に基づいて学校間比較を行うことにした。その理由は、調査に当たり15の高校に協力を得て実施したので、

---

と、統計的検定等については他の機会に実施し、随時、公表したい。

6) 本来であれば柴（2015）の共同研究者、荒木・柴（2015）の共著者との共同での論文とすべきかもしれないが、速報性と暫定性を考慮して、回答の集約と入力にあたっている柴の責任において、単純集計の範囲で調査結果の概要を提示するものである。

高校生一般の問題意識というよりは協力校の特徴が色濃く出ていると判断したためである。その分析結果を解釈する際に、会計に対する好き嫌い（Q5）、と会計学習の効果（Q11）の結果についても加味して学校の特徴に迫ることとした。

一方、荒木・柴（2015）では、対象とする質問で無回答を含むものを削除して、有効回答を1653に絞り込んだ。また、柴（2015）が恣意的に解釈していないかを確認するためにも、同じ10個の枝間にQ5とQ11も加えて分析して、学校間比較を行った。

図表1 高校生向けアンケート調査の分析における重点項目

記号	質問内容	
Q5	好き嫌い	会計の科目の学習は好きですか。以下の7点スケールのどの位置（1から7）になるか主観でかまいませんので該当する番号を○で囲んでください。7は大好きである、4はいずれでもない、1は大嫌いであるとし、6と5、3と2はそれぞれの中間段階と考えてください。
Q11	学習効果	会計を学習していて他の教科科目と異なり何か良かったことはありますか。以下の選択肢からもっとも主要と思うものを1つ選んで○を付けてください。 ① 検定資格に合格したこと ② 計算等の実社会に役立つ数的能力が高まったこと ③ 数字（コンマ等）をきれいに書けるようになったこと ④ ビジネス用語に親しみを持ったこと ⑤ 反復学習による達成感が身についたこと ⑥ その他（具体的に）
Q15-1	記録機能	会計（簿記を含む。以下では会計のみ表記）は、企業が取引を記帳し、財務諸表を作成することに重点があると思いますか。
Q15-2	管理機能	会計は、企業が事業投資や経営管理をするための適切な情報を提供することに重点があると思いますか。
Q15-3	情報提供機能	会計は、企業が株主などの投資家の意思決定に役立つ情報を提供することに重点があると思いますか。
Q15-4	利害調整機能	会計は、企業が株主、債権者、従業員、仕入先、得意先、国・地方自治体、地域住民などの利害関係者と利害調整を行うことに重点があると思いますか。
Q16-1	記帳技術	高校の会計教育では、商業簿記や工業簿記などの知識を習得することが重要である。
Q16-2	財務諸表の作成能力	高校の会計教育では、簿記の知識を前提に財務諸表の作成に関連する会計基準の適用に関する能力を修得することが重要である。
Q16-3	財務諸表の分析能力	高校の会計教育では、財務諸表を分析し、企業経営を改善する能力を養成することが重要である。
Q16-4	経営意思決定の判断能力	高校の会計教育では、財務諸表を活用して、資金調達や事業投資等の経営意思決定を行う判断能力を養成することが重要である。
Q16-5	社会責任に関する関心	高校の会計教育では、企業の社会的責任に基づいて環境問題への取り組みや持続可能な社会を実現することに関連するディスクロージャーについて学ぶことが重要である。
Q16-6	公共部門に関する関心	高校の会計教育では、民間企業以外のNPOや地方自治体の会計を教授することが重要である。

#### （4）協力校のグルーピング

詳細は柴（2015）と荒木・柴（2015）に譲るが、協力校15校は以下のように分類可能である。

図表2 協力校のグルーピング

柴 (2015) におけるグルーピング		荒木・柴 (2015) におけるグルーピング	
第1グループ	B、E、 <u>I</u> 、L、M	B、E、L、M、A、K、O	第3グループ
第2グループ	A、K、O		第1グループ
第3グループ	C、F、 <u>J</u> 、N	C、F、 <u>H</u> 、 <u>I</u> 、N	第2グループ
第4グループ	D、G、 <u>H</u>	D、G、 <u>J</u>	

表中、第1等の名称は任意なので無視されたい。また、荒木・柴 (2015) の第3グループは、BLMとAKOに細分することもできるので、我々の2回の分析はほぼ近似している。四角で囲ったI校、J校、H校が2回の分析で同じグループに属していない。これは回答数の少なさや、分析上の微妙な差異を反映していると思われるので、これら3校を除いて、グループ間の特徴を見るのが良いと思われる。

柴 (2015) のグルーピングは、対象とした10個の質問中、評価の重要度を示す尺度の「6」及び「7」の度数が最多となった質問の数に着目し、3個以上の高校を第1グループ、2個を第2グループ、1個を第3グループ、そして0個を第4グループとした。これに対してはグルーピング手法に対する批判も予想されるので、荒木・柴 (2015) では、対象の範囲を拡大するとともに、テンドログラム (樹木図) を描くことにより、複数のグルーピングの可能性を探った。

荒木・柴 (2018) による3つのグループの特徴は、第3グループが会計機能についても、会計の学習項目についても、高校生が最も高い評価を与えている高校群である。反対に、第2グループは、第3グループと反対に、会計機能についても、会計の学習項目についても、高校生が最も低い評価を与えている高校群である。第1グループはその中間の高校群である。このように3グループ化の方が4グループ化よりも分かりやすい分類となっている。

一方、柴 (2015) では第1グループ (荒木・柴 (2015) の第3グループ) のうち、B校とE校が、会計の学習項目に対する評価の出方が違うという意味で、互いに際立った特徴を有する高校であるとしていたが、荒木・柴 (2015) では逆にこれら2校が最も近い関係にあるという結果になった。その理由は、前者が学習項目「財務諸表の分析能力」(Q16-3) に対する評価を強調していたのに対して、後者が会計機能及び学習項目のみならず好き嫌いや学習効果までの12項目全体で特徴を探ったために、両校が近似した高校と判断されたのである。これら両校は近隣の諸大学との連携を強く模索する高大接続に熱心な高校であるという点でも近似している。

### (5) 教育上の示唆

柴 (2015) におけるQ15 (会計の機能) とQ16 (会計教育の項目) の質問は、出題者の意図としては「大学教員が重要と考える会計機能や教育項目 (領域)」のいずれが高校生でも高く評価されているかを知りたいということであった。ここでは、高校生による評価を総括すると、

会計機能についても会計教育項目についても、高い評価を受けているものが限定されていると結論付けている。ここからは推定になるが、大学教員と高校教員で意識に差があると結論付ける傾向にある。果たしてそうなのかを検証するために、大学教員と高校教員にも同種のアンケートを実施した。後程、その結果と比較する。

これに対して、荒木・柴（2015）では、柴（2015）の分析段階で十分に検証されていなかった点が検証された。

- 企業における簿記・会計の単なる記帳機能ではなく、働きの有効性を評価する生徒は、会計が好きな傾向を見ることができる。
- 高校の簿記・会計の教育において財務諸表の作成および活用を中心とする能力の習得を評価する生徒は好きの傾向にあることがわかる。

この2点は質問者が暗黙のうちに期待していた結果でもある。それが柴（2015）の単純集計では明確にならなかったが、荒木・柴（2015）の分析で明らかにできたことは、回答結果の再検討の一番の成果であった。

以上、最も重要と考える点のみに絞って過去の分析結果を紹介した。なお、我々の調査の共同研究者である浦崎、島本、岩崎がそれぞれの視点で回答結果を解釈しているのでそれらについては柴（2015）を参照されたい。

## 2 会計教員向けアンケート調査の結果

### （1）会計教員向けアンケート調査の概要

会計教育に対する教員の意識を明らかにするために2種類の調査票を用意した。一つは大学教員向け（本文末の資料1）であり、いま一つは高校等教員向け（同じく、資料2）である。

大学教員向け調査に関しては、2015年8月と9月に開催された会計関連の諸学会において共同研究者が協力して調査票を配布し、回収を呼び掛けた。その結果、10月末現在で117の回答を得た。高校等教員向けについては、高校教員と専門学校教員に大別し、各々、独自の方法で配布と回収を行った。高校教員については、昨年実施した高校生の意識調査に協力いただいた15校だけでなく、日本簿記学会等の機会に参加された先生方にも協力いただき、都合30校前後の教員から153の回答を得た。専門学校教員については、全国経理教育協会の協力を仰ぎ、全国の専門学校から223の回答を得た。これら合計で493が総回答数となる。

大学教員向けアンケート調査と、高校等教員向け調査は、基本部分は同じ構造であるが、一部の質問内容が異なる。大学教員のみに対する質問には質問番号の後に「u」を付した（たとえば、41u）。また、高校等教員のみに対する質問には質問番号の後に「h」を付した（たと

ば、10h)。これらの識別子がない質問が36個ある。このうち6個は回答者の属性に関わる質問であり、他の30個は大学、高校、専門学校の教員間の意識を比較するために用意された質問であり、今回の調査の中心部分である。その30個のうち10個は、高校生に対する調査で重要項目とした10個の質問と実質的に同じ内容である。

大学教員向け調査と高校等教員向け調査に共通して、記述による回答を求める質問が4つあり、あわせて調査後にインタビューに応じていただけるかという質問がある。この記述部分の入力と、事後のインタビューは未実施である。特にインタビューについては、回答の概略を示して、具体的な意見を引き出したいという計画であるので、実施は少し先になる。

以上から、本稿では速報性を重視しての仮集計であるので、暫定版とならざるを得ないが、それでもすでにいくつも興味ある結果が出ているので、それを示すことにも意義があるだろうと考えている。

## (2) 柴 (2015)・荒木・柴 (2015) で報告した高校生による意識との対比

今回の会計教員向けアンケート調査の回答のうち、図表1で示した重点項目の中から10個の質問についての回答者属性別の度数と平均値を一覧表にしたものが図表3である。図表3には荒木・柴 (2015) で高校生向けの調査結果を再計算した平均値をグループ別に示している。なお、資料1には回答者属性別の行に、選択肢別の度数も分かるように集計しているので参照されたい。

図表3 重点項目とした質問に対する回答の平均値

高校生向けアンケート調査			会計教員向けアンケート調査						
荒木・柴 (2015) の分析			2調査の質問の対応関係			本稿における柴の分析			
第1G	第2G	第3G	質問番号	質問内容	質問番号	全体	大学	高校	専門学校
5.04	4.78	5.46	Q15.1	記録機能	Q20	4.99	4.85	4.98	5.06
5.06	4.88	5.68	Q15.2	管理機能	Q31	5.44	5.42	5.29	5.55
4.93	4.59	5.32	Q15.3	情報提供	Q36	5.37	5.50	5.24	5.39
4.83	4.56	5.28	Q15.4	利害調整	Q14	5.20	5.37	5.03	5.23
5.29	5.01	5.74	Q16.1	記帳技術	Q13	5.75	5.53	5.74	5.88
4.99	4.75	5.47	Q16.2	財表作成	Q23	5.18	4.70	5.22	5.41
4.82	4.54	5.25	Q16.3	財表分析	Q35	5.58	5.71	5.55	5.52
4.70	4.41	5.10	Q16.4	経営能力	Q27	5.47	5.47	5.29	5.58
4.51	4.24	4.83	Q16.5	社会責任	Q29	4.80	4.86	4.86	4.73
4.23	4.20	4.57	Q16.6	公共部門	Q16	4.25	4.86	4.10	4.03

図表3から分かることは以下の諸点である。

- ① 高校生向けアンケート調査では、第3グループの高校群に属する高校生が、4つの会計機

能、6つの学習項目のすべてについて、他の2つのグループよりも重要性が高いと評価している。第2グループはその反対であり、第1グループはその中間である。

- ② 会計教員向けアンケート調査では、大学教員、高校教員、専門学校教員の間で、このような評価の序列は確認できない。むしろ、質問項目ごとに最頻度数の質問項目が変わっている。このことは、大学教員、高校教員、専門学校教員というグループの間で、評価対象が異なるということを示している。
- ③ 専門学校の教員は会計機能のうちの記録機能と管理機能をより重視し、学習項目のうちの記帳技術と財務諸表の作成と経営意思決定における判断能力を重視する傾向が顕著である。
- ④ これに対して、大学教員は、会計機能のうちの情報提供機能と利害調整機能をより重視し、学習項目のうちの財務諸表の分析を重視するほか、社会責任や公共部門への会計の役割に相対的に高い関心を示している。
- ⑤ この2者に対して、高校教員は、大学教員と専門学校教員との間の中間的な位置づけとなっている。専門学校教員ほどではないが、会計機能のうちの管理機能と、学習項目のうちの財務諸表の作成に高い評価を与えている。また、同時に、大学教員ほどではないが、社会責任や公共部門への関心もやや関心が高いことを示している。
- ⑥ 以上から、特徴が明確な教育者集団として、大学教員と、専門学校教員を対比させるとすると、専門学校教員は会計情報の作成に関してより高い関心を示しているのに対して、大学教員は会計情報の利用に関してより高い関心を示しているという特徴が浮き彫りになった。高校教員はそのいずれにも徹していないが、どちらかという会計情報の作成に関心が高いという意味で専門学校教員に近いと言える。

ついで、高校生についてはグループ別に、教員についてはその属性別に、会計機能の4項目と学習項目の6項目のそれぞれについて順位付けで示したものが、図表4（会計機能に関する順位づけ）と図表5（学習項目に関する順位づけ）である。

図表4 会計機能に関する順位づけ

高校生向けアンケート調査			会計教員向けアンケート調査						
荒木・柴（2015）の分析			2調査の質問の対応関係			本稿における柴の分析			
第1G	第2G	第3G	質問番号	質問内容	質問番号	全体	大学	高校	専門学校
2	2	2	Q15.1	記録機能	Q20	4	4	4	4
1	1	1	Q15.2	管理機能	Q31	1	2	1	1
3	3	3	Q15.3	情報提供	Q36	2	1	2	2
4	4	4	Q15.4	利害調整	Q14	3	3	3	3

- ① 図表4では第3グループの高校で会計機能4項目とも最も高い評価が示されていた。しかしながら、その重要性の程度を度外視して、グループ内での相対的な重要性をみると、3つ

のグループすべてについて、会計機能に対する評価の順位が同じであることが分かった。すなわち、どのグループに属する学校であれ、高校生は、会計の管理機能、記録機能、情報提供機能、利害調整機能の順に重要であると評価しているという結果が得られた。したがってこの傾向は高校生一般に通ずる傾向だと言えるかもしれない。

- ② しかし大学等の3つの属性で同じ傾向が確認されるかという点、これは直ちに否定される。その属性の属する教員も会計の管理機能と情報提供機能に高い評価を与えているが、大学教員が情報提供機能を重視するのに対して、高校教員と専門学校教員は管理機能を重視するという点で異なる。

図表5 学習項目に関する順位づけ

高校生向けアンケート調査			会計教員向けアンケート調査						
荒木・柴 (2015) の分析			2調査の質問の対応関係			本稿における柴の分析			
第1G	第2G	第3G	質問番号	質問内容	質問番号	全体	大学	高校	専門学校
1	1	1	Q16.1	記帳技術	Q13	1	2	1	1
2	2	2	Q16.2	財表作成	Q23	4	6	4	4
3	3	3	Q16.3	財表分析	Q35	2	1	2	3
4	4	4	Q16.4	経営能力	Q27	3	3	3	2
5	5	5	Q16.5	社会責任	Q29	5	4	5	5
6	6	6	Q16.6	公共部門	Q16	6	4	6	6

- ③ 図表4で確認できた傾向と同じような傾向が図表5でも確認できる。すなわち、第3グループの高校で学習項目6項目とも最も高い評価が示されていた。しかしながら、その重要性の程度を度外視して、グループ内での相対的な重要性をみると、3つのグループすべてについて、学習項目に対する評価の順位が同じであることが分かった。すなわち、どのグループに属する学校であれ、高校生は、会計の学習項目として、記帳技術、財務諸表の作成、財務諸表の分析、意思決定における判断応力、社会責任に関する事柄、公共部に関する事柄の順に重要であると評価しているという結果が得られた。したがってこの傾向は高校生一般に通ずる傾向だと言えるかもしれない。しかも、柴 (2015) で指摘しているように、ほとんどの高校で記帳技術の習得と財務諸表の作成に関する知識までで関心が止まっているという傾向がみられる。

- ④ これに反して、会計教師の属性間においては、著しい相違がみられる。大学教員は、第一に財務諸表分析という学習項目の重要性を高く評価し、ついで記帳技術、経営意思決定における判断能力と続く一方で、財務諸表の作成という学習項目には一番低い評価を与えている。これに対して高校教員と専門学校教員はやや似ている。彼らは何より記帳技術の習得を重視し、ついで、財務諸表の分析が経営意思決定における判断能力の養成に力点を置いている。やや意外かもしれないが、高校教員も専門学校教員も財務諸表の作成には高い評価を与えて

いない。

- ⑤ 図表4と図表5を通して、新たな疑問が生まれた。我々は高校生に対する意識調査に際して、自ら独自の判断を行うほど会計になれていない高校生による回答の選択はおそらく教師の日常の言動に大きく影響されているだろうというものである。その期待が今回覆されたと言ってよい。というのも、会計機能に対する高校生の評価の順位も、学習項目の関する高校生の評価の順位にも、いずれのグループでも同じであるという点で何か普遍性を感じる。しかし、高校教師の意識においては、会計機能に関しても、学習項目に関しても、高校生の順位と異なるのである。そこで新たに生まれる疑問とは、高校教師の意識と異なる高校生の意識が生まれる原因は何かというものである。

### （3）質問の仕方と回答の分布

今回の調査では、実質的に同じ問題に対して肯定的に問いかけると同時に否定的にも問いかけた例（Q34とQ17）や同じ質問を2度問いかけた例（Q33とQ25）がある。

図表6 正反対の問いかけに対する回答の分布

肯定的な問いかけ					否定的な問いかけ				
全体	大学	高校	専門学校	質問内容	質問番号	全体	大学	高校	専門学校
5.51	4.73	5.75	5.76	Q34	Q17	2.11	3.02	1.89	1.79
Q34 一連の会計教育の最初の段階に簿記の授業を置くことは効果的だと思いますか。					Q17 一連の会計教育の最初の段階に簿記の科目を置くのは効果がないと思いますか。				
回答の分布		Q17							
		選択肢1	選択肢2	選択肢3	選択肢4	選択肢5	選択肢6	選択肢7	合計
Q34	選択肢1	4		1		1	1	5	12
	選択肢2	1	6			2	5		14
	選択肢3	2	1	6	3	6			18
	選択肢4	8	5	8	30	3		1	55
	選択肢5	18	40	29	7	1	1		96
	選択肢6	77	69	9	5	2	1		163
	選択肢7	116	9	4	1			5	135
合計	226	130	57	46	15	8	11	493	

- ① 図表6は一連の会計科目の授業の最初の段階に簿記を持ってくるかいなかという問題に対する回答の分布である。対角線上の白抜きの回答数の各設問の合計数に対する割合は、Q34の7：Q17の1の組み合わせで85.9%と51.3%、6と2の組み合わせで42.3%と53.1%、5と3の組み合わせで30.2%と50.9%、4と4の組み合わせで54.5%と65.2%、3と5の組み合わせで33.3%と40.0%、2と6の組み合わせで62.5%と35.7%、そして1と7の組み合わせで45.5%と41.7%となった。これら対角線上の回答の260は全回答数493の52.7%であり、各セルの占有率はQ34が平均で50.6%、Q17が平均で48.3%であった。

- ② このような回答の分布を考慮したとしても、今回の調査では、一連の会計教育の最初の段階に簿記の授業を置くことは効果的だと思われると解釈できる。しかし、簿記が先か会計が先かという論争に対しては、直接的なヒントとなるわけではない。

図表7 同じ質問に対する回答の分布

同じ質問									
全体	大学	高校	専門学校	問内容	質問番号	全体	大学	高校	専門学校
2.74	2.94	2.69	2.66	Q33	Q25	2.94	3.31	2.70	2.90
Q33 「不満足な授業」だったときの要因は、学生の受講態度が悪かったからだと思いますか。					Q25 あなたにとって「不満足な授業」だったときは、学生の受講態度が悪かったからだと思いますか。				
回答の分布		Q25							
		選択肢1	選択肢2	選択肢3	選択肢4	選択肢5	選択肢6	選択肢7	合計
Q33	選択肢1	100	9	2	7	1		1	120
	選択肢2	11	80	11	9	7	4		122
	選択肢3		5	54	13	3	1		76
	選択肢4	1	5	8	98	10	6	1	129
	選択肢5	2		2	4	20	3		31
	選択肢6				3	1	4	2	10
	選択肢7	1						2	3
	空白			1	1				2
合計		115	99	78	135	42	18	6	493

- ③ 図表7は教員が「不満足な授業」だったと感じる原因が学生の受講態度で決まると思うかという質問であり、この質問が2回繰り返される。対角線上の白抜きの回答数の各設問の合計数に対する割合は、Q33の1：Q25の1の組み合わせで65.9%と83.3%、2と2の組み合わせで80.1%と65.6%、3と3の組み合わせで69.2%と71.1%、4と4の組み合わせで72.6%と76.0%、5と5の組み合わせで47.6%と64.5%、6と6の組み合わせで22.2%と40.0%、そして7と7の組み合わせで33.3%と66.7%となった。これら対角線上の回答の358は全回答数493の72.6%であり、各セルの占有率はQ33が平均で55.8%、Q25が平均で66.7%であった。
- ④ このような回答の分布を考慮したとしても、今回の調査では、教師が感じる「不満足な授業」の原因が学生の受講態度が原因ではないと思われると解釈できる。しかし、ここでは何が原因であるかの直接的なヒントとなるわけではない。

#### (4) 授業の満足度に対する教師の理解について

前節の図表6や図表7で確認したように質問の仕方によって回答がどのように変わるか特定はできないものの、それでもある程度の説明力があると考えられる。今回の調査では、授業に対する教師の意識に関して10個の質問を行っている。そのうち2個は同じ質問である。これらの質問の意図は、教員の心理的側面と学生の間を問うている。ここで「今日の授業はうまく

いった（満足できた）」と感ずる場合を「満足な授業」とし、「今日の授業はうまくいかなかった（満足できなかった）」と感ずる場合を「不満足な授業」としている。

図表 8 授業の出来不出来と学生に関する教師の心理

質問番号	質問内容	全 体	大 学	高 校	専門学校	結 論
Q11	満足な授業が多いと感ずるか	4.59	4.71	4.24	4.78	肯定
Q12	満足な授業は学生にとって良い授業だ	5.00	5.08	4.75	5.13	肯定
Q19	満足な授業の原因は学生の良き態度だ	3.47	3.70	3.37	3.42	否定
Q26	教えるのが楽しいと感ずることが多いか	5.45	5.21	5.31	5.66	肯定
Q38	不満足な授業が多いと感ずるか	3.53	3.36	3.98	3.31	否定
Q21	不満足な授業は学生にとって良くない授業だ	4.96	4.75	5.06	5.00	肯定
Q25	不満足な授業の原因は学生の良くない態度だ	2.94	3.31	2.70	2.90	否定
Q33	不満足な授業の原因は学生の良くない態度だ	2.74	2.94	2.69	2.66	否定
Q15	教えるのがつらいと感ずることが多いか	2.86	3.02	3.12	2.61	否定
Q39	学生による低評価は授業方法変更に通じるか	5.62	5.07	5.55	5.95	肯定

- ① 回答の平均値を見ると、大学教員、高校教員、専門学校教員という属性に関係なく、授業と学生の関係に一定の傾向が読み取れる。
- ② 教師は満足な授業ができたと感ずることが多く（Q11）、また教師が満足できたと感ずる授業は学生にとっても良い授業だと感ずている（Q12）。これらと関連して、教師は教えるのが楽しいと感ずている（Q26）。
- ③ これと裏返しに、教師は不満足な授業が多いとは感ずておらず（Q38）、また教師が満足できないと感ずる授業は学生にとっても良くない授業だと感ずている（Q21）。これらと関連して、教師は教えるのがつらいと感ずることは多くない（Q15）。
- ④ 一方、満足な授業の原因が学生の良き態度、不満足な授業の原因が学生の良くない態度であるという関係は否定されている（Q19、Q25、Q33）。教師は自身の授業の良し悪しは、教師の問題だと感ずているということであろう。
- ⑤ 最後に、学生による授業評価の結果に対しては教師は敏感に反応すると読める回答となっている（Q39）。
- ⑥ 総じて、教師の積極的姿勢が確認できたと考えられる。教師は授業の出来不出来は学生の態度が原因ではないと感ずている一方で、自身にとっての満足不満足が学生に影響すると感ずている。その結果、学生からの評価に対しては積極的に対応しようとする。このような解釈が成立する。

### （5）その他の課題

以上に加えて、調査では、多岐にわたる問題を取り上げるための質問を用意した。それらは

図表9に要約している。

図表9 多面的な質問に対する回答

質問番号	質問内容	全 体	大 学	高 校	専門学校	結 論
Q18	大学は高大接続を意識して教育内容を見直すべき	4.39	3.92	4.71	4.41	不統一
Q22	教育内容・教育方法を標準化すべきではない	3.95	3.90	3.87	4.03	否定
Q28	「暗記こそ学力向上の秘訣だ」を支持するか	3.29	3.33	3.37	3.21	否定
Q30	教科・科目に対する好き嫌い、教科・科目の学力は関連しないと感じるか	3.30	3.43	3.42	3.14	否定
Q32	簿記検定は教育上問題が多いか	3.61	4.15	3.73	3.24	不統一
Q40	「好きこそ物の上手なれ」を肯定するか	5.87	5.73	5.89	5.94	肯定

- ① 大学教員と高校教員・専門学校教員で意見が分かれる結果となった質問が二つある。第1は、Q18「大学は高大接続を意識して教育内容を見直すべき」に対して大学教員はやや肯定的であるが、高校等教員はやや肯定的である。第2はQ32「簿記検定は教育上問題が多いか」に対して、大学教員はやや肯定的であるが、高校等教員は否定的である。
- ② Q22「教育内容・教育方法を標準化すべきではない」が否定されているので、標準化が望まれると解釈できる。
- ③ Q28「暗記こそ学力向上の秘訣だ」を支持するか」が否定されているので、暗記中心の学習は否定される。
- ④ Q30「教科・科目に対する好き嫌い、教科・科目の学力は関連しないと感じるか」も否定されているので、やはり「教科・科目に対する」好き嫌いが重要だと意識されている。
- ⑤ Q40「好きこそ物の上手なれ」を肯定するか」は強く肯定されている。
- ⑥ ①の不統一を除けば、あとの質問の回答から教育に対する教師の平均像が見てとれる。これに対して、高大接続や簿記教育については大学教員と高校等教員で理解に差がある。

おわりに

本稿では会計教員に対して実施したアンケート調査の回答の速報性を重視する一方、暫定性を踏まえて、概要を紹介した。詳細な分析については共同研究者、共著者と相談のうえで綿密な分析を実施する必要があるが、回答のとりまとめを行う立場から、単純集計で顕著になる事項のみをここに取りまとめた。

柴 (2015) や荒木・柴 (2015) で対象とした高校生に対するアンケート調査の結果とは異なる教師の意識が多く確認できたことが収穫であった。

会計の機能に関しては、教師は意外にも「記録機能」を重視していないことが印象的であった。

会計の学習項目に関しては、教師は財務諸表の作成に関して低い評価しか与えていないということも印象的であった。

会計教育の入り口は簿記からという意見には反対もあると承知しているが、調査では、肯定的あることが確認された。

教師の授業に対する満足・不満足は学生の受講態度とは関係ないことが確認された一方で、この満足・不満足という実感が学生の理解にも影響していると教師が感じていることが重要であると確認できた。

以上の傾向に対して、高大接続を考慮した大学のカリキュラムと簿記検定の功罪に関して、大学教員と高校等教員の間で見解が分かれたことが印象的であった。大学教員は高大接続を考慮した上でのカリキュラム改革には積極的ではないこと、また、簿記検定は会計教育において問題ありと感じていることが確認できたが、高校教員と専門学校教員は反対の意見を有している。

こうした対立にも結び付くが、大学教員は会計情報の利用の側面を重視しているのに対して、専門学校教員は会計情報の作成の側面を重視していること、高校教員はどちらかという専門学校教員に近い反応を示していることが確認できた。

この調査については、調査票の配布先の一部（ごく少数）からの回収が済んでいないし、不備な回答のクリーニングが完了していないけれども、これらの影響は少ないと予想されることから、暫定的なとりまとめを行った。

また、共同研究者等の意見を踏まえて綿密な分析計画を立てていないので、選択肢や属性ごとの頻度や平均に限定して、研究代表者である筆者の責任において、回答結果の記述を行った。統計的な分析は追って実施したい。

#### 参考文献

柴健次（2015）『調査報告書「会計教育に関するアンケート：高校生向けアンケート」の結果』科学研究費基盤研究（A）課題番号25245057、『会計リテラシーの普及と定着に関する総合的研究』研究代表者 柴健次（関西大学）。

荒木孝治・柴健次（2015）「高校生の会計教育に関する意識——「会計教育に関する高校生アンケート」の分析——」『関西大学商学論集』第60巻第3号、1-19頁。

## 資料1

会計教育に関するアンケート  
大学教員向けアンケート 2015年

私たち科研チームでは、会計専門家のための会計教育（専門会計教育）を除いて、幅広い層に対する教養としての会計（教養会計）の在り方と、その教養会計で学ぶべき内容（会計リテラシー）の特定化の研究に取り組んでおります。

その研究の基礎とするために、質問内容が微妙に異なる数組のアンケート調査を準備しました。これまでに学ぶ側の意識調査等を主にした数組のアンケートを実施しました。みなさまに今回ご回答いただくアンケートは教える側の意識調査等を主にした「大学教員向けアンケート」です。

「大学教員向けアンケート」では、大学の学部課程における会計教育で何を教え・学ぶべきかを考えるヒントとして、皆様のご意見を聞こうというものです。高校等の過程については別途アンケートを用意していますので、共通の質問については高大比較を試みる予定です。

別配布の回答用紙につきましては、先生にアンケートをお願いした我々担当者に直接ご提出いただくか、回答用紙をPDF化したりデジカメで写していただいたうえでそのファイルをメールで柴科研（shibakaken@gmail.com）あてにお送りいただく等、ご都合の良い方法をお願いします。

本調査は、『会計リテラシーの普及と定着に関する総合的研究』研究代表者 柴健次（関西大学）の一部を構成するものであり「大学教員向けアンケート」は会計教員意識等調査研究班（班長柴健次）が責任を持って実施するものであります。このアンケートで得た情報は本科研の研究目的以外に利用いたしません。どうかご協力のほどお願い申し上げます。

科学研究費基盤研究（A） 課題番号25245057

研究期間 2013年度から2015年度

『会計リテラシーの普及と定着に関する総合的研究』

研究代表者 柴 健次（関西大学）

研究分担者 岩崎 千晶（関西大学）

浦崎 直浩（近畿大学）  
工藤栄一郎（西南学院大学）  
佐藤 信彦（熊本学園大学）  
富田 知嗣（関西大学）  
簇本 智之（小樽商科大学）  
福浦 幾巳（西南学院大学）  
松本 敏史（早稲田大学）  
山田 康裕（立教大学）

### 会計教育に関するアンケート

#### 第1部 回答者の属性に関する質問

##### Q1（年齢）

あなたの年齢が含まれる範囲について、以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

###### 選択肢

- 1 20歳～29歳
- 2 30歳～39歳
- 3 40歳～49歳
- 4 50歳～59歳
- 5 60歳～69歳
- 6 70歳以上

##### Q2（性別）

あなたの性別を選択肢の番号でお答えください。

###### 選択肢

- 1 男
- 2 女

##### Q3u（職位）

あなたの職位を以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

###### 選択肢

- 1 常勤の教授

- 2 常勤の准教授
- 3 常勤の講師
- 4 常勤の助教
- 5 非常勤の教員
- 6 その他

#### Q4 (教育歴)

あなたはこれまでにどれくらいの年数、会計科目(簿記、原価計算、財務会計、管理会計、財務諸表分析、その他会計関連科目)を教えてきましたか。合計年数でお考えのうえ、以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

##### 選択肢

- 1 5年未満
- 2 5年以上10年未満
- 3 10年以上20年未満
- 4 20年以上30年未満
- 5 30年以上

#### Q5 (教員として担当している分野)

あなたの教員として担当している教科・科目をあえて財務会計と管理会計に分類するとしたら、主としてどちらの分野ですか。その際、財務会計は財務会計以外に簿記、財務諸表分析等を含み、管理会計は原価計算を含むものとします。以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

##### 選択肢

- 1 どちらかという財務会計の教員である
- 2 どちらかという管理会計の教員である
- 3 いずれにも特化しない教員である
- 4 教育に従事していない

#### Q6 u (研究者としての分野)

あなたの研究分野をあえて財務会計と管理会計に分類するとしたら、あなたは主としてどちらの分野の研究者ですか。その際、財務会計は財務会計以外に簿記、財務諸表分析等を含み、管理会計は原価計算を含むものとします。以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

**選択肢**

- 1 どちらかというと財務会計の研究者である
- 2 どちらかという与管理会計の研究者である
- 3 いずれにも特化しない研究者である
- 4 研究者ではない

## Q7（回答者の学習歴1）

あなたは会計を最初に学んだのはいつですか。以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

**選択肢**

- 1 高校
- 2 大学（短大・高等専門学校を含む）
- 3 大学院
- 4 専門学校（簿記会計等）
- 5 会社等の職場
- 6 その他（独学等）

## Q8（回答者の学習歴2）

あなたは、その後教員になるまでの間、会計を集中的に学んだのはいつですか。以下の選択肢の中から該当するものを1つ選んで、その番号をお答えください。

**選択肢**

- 1 高校
- 2 大学（短大・高等専門学校を含む）
- 3 大学院
- 4 専門学校
- 5 会社等の職場
- 6 その他（独学等）

## Q9u（回答者の所属）

あなたの所属先について以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

**選択肢**

- 1 国公立大学（高等専門学校を含む）
- 2 私立大学（4年制）
- 3 私立大学（2年制）
- 4 高校
- 5 専門学校（簿記会計等）
- 6 その他

#### Q10u（回答者の授業の場所）

あなたの主たる授業先について以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

#### 選択肢

- 1 高校
- 2 大学（短大・高等専門学校を含む）
- 3 大学院（研究大学院）
- 4 会計専門職大学院
- 5 専門学校（簿記会計等）
- 6 会社等の職場
- 7 その他

### 第2部 回答者の意識等に関する質問

以下の質問群については質問の末尾が「思いますか」、「感じますか」、「多いですか」等となっています。この種の質問については、あなたの「意識のレベル」についての回答を求めています。いずれの質問についても、以下の7点スケールのどのレベル（7から1）になるか主観でかまいませんので該当するレベルを番号でお答えください。7は「強くそう思う」、4は「いずれでもない」、1は「全くそう思わない」とし、6と5、3と2は中間段階と考えてください。

凡例 回答者の意識のレベル						
強く そう思う			いずれで もない			全くそう 思わない
7	6	5	4	3	2	1

Q11 「今日の授業はうまくいった（満足できた）」と感じることが多いですか。

\*以下の質問群では、「今日の授業はうまくいった（満足できた）」は「満足な授業」、「今

日の授業はうまくいかなかった（満足できなかった）」は「不満足な授業」と略記します。」

Q12 あなたにとって「満足な授業ができたとき」、学生にとって良い授業だったと思いますか。

Q13 会計教育では、商業簿記や工業簿記などの知識を習得させることが重要であると思いますか。

Q14 企業が株主、債権者、従業員、仕入先、得意先、国・地方自治体、地域住民など利害関係者と利害調整を行うことに、会計機能の重点があると思いますか。

Q15 「教えるのがつらい」と感じる人が多いですか。

Q16 会計教育では、民間企業以外のNPOや地方自治体の会計を教えることが、重要であると思いますか。

Q17 一連の会計教育の最初の段階に簿記の科目を置くのは効果がないと思いますか。

Q18 大学は高校とのカリキュラムの接続を意識して教育内容を見直すべきであると思いますか。

Q19 あなたにとって「満足な授業」は学生の受講態度が良いからだと思いますか。

Q20 企業が取引を記帳し財務諸表を作成することに、会計機能の重点があると思いますか。

Q21 あなたにとって「不満足な授業」だったとき、学生にとって良くない授業だったと思いますか。

Q22 教育も競争環境に置かれているのであるから各々が自由に工夫すればよいのであって教育内容であれ教育方法であれ標準化を目指すべきではない。

Q23 会計教育では、簿記の知識を前提に、財務諸表の作成に関連する会計基準の適用に

関する能力を教えることが重要であると思いますか。

Q24 簿記の検定試験は、教育上有効な点が多いと思いますか。

Q25 あなたにとって「不満足な授業」だったときは、学生の受講態度が悪かったからだと思いますか。

Q26 「教えるのが楽しい」と感じることが多いですか。

Q27 会計教育では、財務諸表を活用して、資金調達や事業投資等の経営意思決定を行う判断能力を養成することが重要であると思いますか。

Q28 「暗記こそ学力向上の秘訣だ」は重要だと思いますか。

Q29 会計教育では、企業の社会的責任に基づいて環境問題への取り組みや持続可能な社会を実現することに関連するディスクロージャーについて教えることが重要であると思いますか。

Q30 あなたは「教科・科目に対する好き嫌い」と「教科・科目の学力」は関連しないと思いますか。

Q31 企業が事業投資や経営管理を行うための適切な情報を提供することに、会計機能の重点があると思いますか。

Q32 簿記の検定試験には、教育上問題点が多いと思いますか。

Q33 「不満足な授業」だったときの要因は、学生の受講態度が悪かったからだと思いますか。

Q34 一連の会計教育の最初の段階に簿記の授業を置くことは効果的だと思いますか。

Q35 会計教育では、財務諸表を分析し、企業経営を改善する能力を養成することが重要であると思いますか。

- Q36 企業が株主などの投資家の意思決定に役立つ情報を提供することに、会計機能の重点があると思いますか。
- Q37 教育には最低限の質保証が求められるので標準化さるのとは当然である。
- Q38 授業を終えた後に「今日の授業はうまくいかなかった（満足できなかった）」と感じることが多いですか。
- Q39 学生による授業評価（学生の反応）が低いときは授業の方法を変えようと思いますか。
- Q40 「好きこそ物の上手なれ」はその通りだと思いますか。
- Q41u あなたは研究者と教育者のいずれかと聞かれたら、自身のことを「どちらかと言えば研究者である」と思いますか。
- Q42u 大学においても、会計教育の内容を標準化する観点からシラバスの標準化（学習指導要領に相当）が必要である。
- Q43u 大学においても、会計教育の教材を標準化する観点から教科書の標準化（検定教科書に相当）が必要である。
- Q44u 大学は専門学校との連携を推進して教育内容を見直すべきである。
- Q45u 所属大学の教育投資は競争に打ち勝つため十分であると思う。
- Q46u 所属大学の教育投資は不十分であるので文部科学省による支援が必要である。
- Q47u 所属大学では、教員の教材開発に対する支援が十分にある。
- Q48u 所属大学では、教員のクラス運営に対する支援が十分にある。
- Q49u 所属大学では、学生の自主的学習に対する支援が十分にある。

Q50u 所属大学では、教員の教材開発に対する支援が十分でないので、国などの主導による教材の開発支援が必要である。

### 第3部 会計リテラシーの必須の内容と具体的科目の状況に関する質問

以下の質問群は記述式になっております。簡潔にお答えいただいても結構ですので、可能な限りご記入ください。

私たち科研チームでは、会計専門家のための会計教育（専門会計教育）を除いて、幅広い層に対する教養としての会計（教養会計）の在り方と、その教養会計で学ぶべき内容（会計リテラシー）の特定化の研究に取り組んでおります。そこでご意見をいただきたいと思っております。

Q-a どこで・誰に対して教えるかに関係なく、与えられた機会が1回限りだとすれば、会計の何について話すのが会計リテラシーの観点から重要でしょうか。時間の制約があっても省くべきではない必須の内容を枠内に文章でお書きください。

Q-b Q-aのご回答を簡潔にキーワードとして表現するとどうなるでしょうか。枠内にキーワードをお書きください。キーワードは最大でも5個以内でお答えください。

Q-c 差し支えなければお答えください。現在所属の職場において、あなたの担当する科目の中で最もうまくいっている科目につき、科目名とその理由をお答えください。

Q-d 差し支えなければお答えください。現在所属の職場において、あなたの担当する科目の中で最もうまくいっていない科目につき、科目名とその理由をお答えください。

資料2

会計教育に関するアンケート  
 高校等教員向けアンケート 2015年

【引用注 柴】 本アンケートは基本的に「大学教員向けアンケート2015年」と同じであるため、以下、内容の異なる質問のみ記載する。

会計教育に関するアンケート  
 第1部 回答者の属性に関する質問

Q3h (職位)

あなたの職位を以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

選択肢

- 1 専門高校（商業高校等）の常勤教員
- 2 専門高校（商業高校等）の非常勤教員
- 3 専門高校（商業高校等）の元（教員）
- 3 専門学校（簿記会計等）の常勤教員
- 4 専門学校（簿記会計等）の非常勤教員
- 5 専門学校（簿記会計等）の元教員
- 6 その他

【引用注 柴】 本問には選択肢3が2度出てくる。高校と専門学校は別々に回収しているので、「3 専門高校（商業高校等）の元（教員）」を選択したと推定される8回答については、「3 専門学校（簿記会計等）の常勤教員」と識別可能な別の記号に付け替えた。

Q6h (得意な分野)

あなたの担当する分野をあえて財務会計と管理会計に分類するとしたら、あなたは主としてどちらの分野が得意ですか。その際、財務会計は財務会計以外に簿記、財務諸表分析等を含み、管理会計は原価計算を含むものとします。以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

選択肢

- 1 どちらかという財務会計が得意である
- 2 どちらかという管理会計が得意である
- 3 会計以外に得意な分野がある
- 4 得意な分野がない

## Q9h (回答者の所属先)

あなたの所属先について以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。選択肢1の「等」はビジネス科など商業科類似の科を意味します。

## 【選択肢】

- 1 商業科等の高校
- 2 総合学科の高校
- 3 普通科の高校
- 4 専門学校（簿記会計等）
- 5 会社
- 6 その他

## Q10h (所属先以外での授業経験)

あなたが現在及び過去において所属先以外の機関で授業経験がある場合、以下の選択肢の中から該当するものを選んで、その番号をお答えください。

## 【選択肢】

- 1 高校
- 2 大学（短大・高等専門学校を含む）
- 3 大学院（研究大学院）
- 4 会計専門職大学院
- 5 専門学校（簿記会計等）
- 6 会社等の職場
- 7 その他

## 第2部 回答者の意識等に関する質問

【引用注 柴】 第2部はQ11からQ40までの30問で構成されており、「大学教員向けアンケート2015年」と同じである。Q41からQ50までの質問は「高校等教員向けアンケート2015年」には存在しない。

## 第3部 会計リテラシーの必須の内容と具体的科目の状況に関する質問

【引用注 柴】 第3部はQaからQdまでの4問で構成されており、「大学教員向けアンケート2015年」と同じである。

資料3 Q11からQ40までの所属別比較

問題	回答者 属性	選択肢1	選択肢2	選択肢3	選択肢4	選択肢5	選択肢6	選択肢7	回答 総数	回 答 平均値
Q11	全 回 答	7	18	60	132	166	87	23	493	4.59
	大 学	2	3	11	33	37	24	7	117	4.71
	高 校	4	9	26	43	51	19	1	153	4.24
	専門学校	1	6	23	56	78	44	15	223	4.78
Q12	全 回 答	20	6	32	109	128	125	72	492	5.00
	大 学	3	1	5	30	30	32	16	117	5.08
	高 校	8	2	17	32	45	33	16	153	4.75
	専門学校	9	3	10	47	53	60	40	222	5.13
Q13	全 回 答	1	9	15	46	121	123	178	493	5.75
	大 学	1	5	4	16	27	23	41	117	5.53
	高 校	0	1	4	13	44	45	46	153	5.74
	専門学校	0	3	7	17	50	55	91	223	5.88
Q14	全 回 答	5	17	21	105	120	134	91	493	5.20
	大 学	2	3	6	14	28	42	22	117	5.37
	高 校	2	6	6	43	37	33	26	153	5.03
	専門学校	1	8	9	48	55	59	43	223	5.23
Q15	全 回 答	127	125	57	106	41	25	12	493	2.86
	大 学	27	28	14	27	10	7	4	117	3.02
	高 校	36	34	19	31	13	13	7	153	3.12
	専門学校	64	63	24	48	18	5	1	223	2.61
Q16	全 回 答	22	56	51	170	86	59	49	493	4.25
	大 学	4	9	10	16	31	31	16	117	4.86
	高 校	6	15	16	70	25	9	12	153	4.10
	専門学校	12	32	25	84	30	19	21	223	4.03
Q17	全 回 答	226	130	57	46	15	8	11	493	2.11
	大 学	34	25	13	19	11	6	9	117	3.02
	高 校	78	36	24	12	1	0	2	153	1.89
	専門学校	114	69	20	15	3	2	0	223	1.79
Q18	全 回 答	39	50	33	155	69	70	77	493	4.39
	大 学	14	20	10	30	16	14	13	117	3.92
	高 校	13	11	7	37	22	35	28	153	4.71
	専門学校	12	19	16	88	31	21	36	223	4.41
Q19	全 回 答	90	74	65	125	79	38	22	493	3.47
	大 学	12	23	16	24	26	11	5	117	3.70
	高 校	34	21	15	46	18	13	6	153	3.37
	専門学校	44	30	34	55	35	14	11	223	3.42
Q20	全 回 答	6	25	31	107	133	116	73	491	4.99
	大 学	2	10	9	21	29	32	14	117	4.85
	高 校	1	5	8	41	47	27	23	152	4.98
	専門学校	3	10	14	45	57	57	36	222	5.06

問題	回答者属性	選択肢1	選択肢2	選択肢3	選択肢4	選択肢5	選択肢6	選択肢7	回答総数	回答平均値
Q21	全回答	15	28	33	114	100	99	103	492	4.96
	大学	4	10	7	26	28	27	15	117	4.75
	高校	6	4	10	38	28	31	36	153	5.06
	専門学校	5	14	16	50	44	41	52	222	5.00
Q22	全回答	36	59	71	178	66	44	39	493	3.95
	大学	10	14	24	29	19	12	9	117	3.90
	高校	8	24	23	57	19	10	12	153	3.87
	専門学校	18	21	24	92	28	22	18	223	4.03
Q23	全回答	8	12	19	93	148	135	77	492	5.18
	大学	5	8	10	22	32	29	11	117	4.70
	高校	1	2	4	32	55	34	25	153	5.22
	専門学校	2	2	5	39	61	72	41	222	5.41
Q24	全回答	6	5	15	86	135	147	99	493	5.39
	大学	1	2	8	26	41	28	11	117	4.98
	高校	4	1	4	22	52	48	22	153	5.28
	専門学校	1	2	3	38	42	71	66	223	5.67
Q25	全回答	115	99	78	135	42	18	6	493	2.94
	大学	17	21	23	31	17	6	2	117	3.31
	高校	44	30	22	46	8	2	1	153	2.70
	専門学校	54	48	33	58	17	10	3	223	2.90
Q26	全回答	5	5	13	80	122	175	93	493	5.45
	大学	3	2	4	22	28	43	15	117	5.21
	高校	2	1	4	28	43	55	20	153	5.31
	専門学校	0	2	5	30	51	77	58	223	5.66
Q27	全回答	4	5	16	67	134	174	93	493	5.47
	大学	1	2	6	13	26	48	21	117	5.47
	高校	1	1	6	25	54	43	23	153	5.29
	専門学校	2	2	4	29	54	83	49	223	5.58
Q28	全回答	85	92	64	154	60	22	16	493	3.29
	大学	21	21	16	33	14	7	5	117	3.33
	高校	28	24	16	53	20	5	7	153	3.37
	専門学校	36	47	32	68	26	10	4	223	3.21
Q29	全回答	4	24	27	146	146	103	43	493	4.80
	大学	3	7	5	21	41	32	8	117	4.86
	高校	0	6	5	50	50	28	14	153	4.86
	専門学校	1	11	17	75	55	43	21	223	4.73
Q30	全回答	70	116	95	101	47	48	16	493	3.30
	大学	15	26	23	21	13	17	2	117	3.43
	高校	15	34	35	33	18	12	6	153	3.42
	専門学校	40	56	37	47	16	19	8	223	3.14

問題	回答者属性	選択肢 1	選択肢 2	選択肢 3	選択肢 4	選択肢 5	選択肢 6	選択肢 7	回答総数	回答平均値
Q31	全回答	0	4	18	79	143	156	93	493	5.44
	大学	0	2	3	16	36	43	17	117	5.42
	高校	0	1	6	30	53	37	26	153	5.29
	専門学校	0	1	9	33	54	76	50	223	5.55
Q32	全回答	52	85	68	167	61	39	21	493	3.61
	大学	5	10	16	46	17	17	6	117	4.15
	高校	11	27	25	49	20	12	9	153	3.73
	専門学校	36	48	27	72	24	10	6	223	3.24
Q33	全回答	120	122	76	129	31	10	3	491	2.74
	大学	17	31	23	33	11	1	0	116	2.94
	高校	44	34	23	35	10	4	2	152	2.69
	専門学校	59	57	30	61	10	5	1	223	2.66
Q34	全回答	12	14	18	55	96	163	135	493	5.51
	大学	7	8	10	28	14	32	18	117	4.73
	高校	4	1	2	9	38	51	48	153	5.75
	専門学校	1	5	6	18	44	80	69	223	5.76
Q35	全回答	1	7	5	56	143	187	94	493	5.58
	大学	1	1	1	11	24	55	24	117	5.71
	高校	0	0	2	21	52	47	31	153	5.55
	専門学校	0	6	2	24	67	85	39	223	5.52
Q36	全回答	1	3	15	94	141	159	80	493	5.37
	大学	0	0	4	10	41	48	14	117	5.50
	高校	0	1	3	41	44	42	22	153	5.24
	専門学校	1	2	8	43	56	69	44	223	5.39
Q37	全回答	25	41	42	197	94	67	26	492	4.22
	大学	8	12	15	32	24	20	6	117	4.16
	高校	6	10	11	67	34	19	5	152	4.25
	専門学校	11	19	16	98	36	28	15	223	4.22
Q38	全回答	22	114	94	150	75	30	7	492	3.53
	大学	6	31	25	34	13	7	1	117	3.36
	高校	2	24	24	50	34	13	5	152	3.98
	専門学校	14	59	45	66	28	10	1	223	3.31
Q39	全回答	7	9	10	61	106	160	140	493	5.62
	大学	4	3	6	23	28	38	15	117	5.07
	高校	1	5	2	23	36	42	44	153	5.55
	専門学校	2	1	2	15	42	80	81	223	5.95
Q40	全回答	5	1	6	54	81	172	174	493	5.87
	大学	2	0	0	12	31	39	33	117	5.73
	高校	2	0	1	14	22	68	46	153	5.89
	専門学校	1	1	5	28	28	65	95	223	5.94